

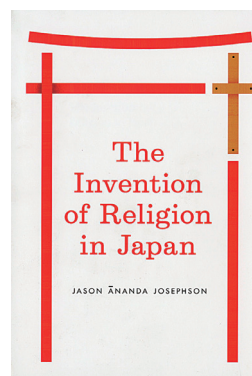
ジェイソン・アーナンダ・ジョセフソン 著

## 『日本における宗教の発明』

Jason Ananda Josephson. *The Invention of Religion in Japan*.  
University of Chicago Press, 2012.

「宗教」概念はいかにして発明されたのか？　これが本書における中心的な問いである。近年に入り、これまで自明なものとされてきた概念に関して、それが実は近代に入って発明・構築されたものであつて、そのためそういった概念を自明視する立場は何らかの政治性を帯びている、という批判がなされるようになってきた。例えば、その先駆的かつ代表的なものとして挙げられるのが、もはや古典と言つてもいいエドワード・サイードによるオリエンタリズム批判である。サイードは、オリエン（東洋）とオクシデント（西洋）という概念が、両者を二項対立的に分類しつつオリエンを劣位に配置することで、オクシデントの側は自らを植民地主義を遂行する主体として立ち上げることが可能になったの

川村覚文



だ、と批判した。また、それ以外には例えばベネディクト・アンダーソンによる「想像の共同体」論も、同様の批判を遂行している代表的なものとして挙げられよう。アンダーソンは、国民国家の枠組みでは自明とされている民族文化共同体の存在と、そういった共同体への帰属意識である「国民意識」について、それが近代における出版市場の広がりなどによって初めてその構築が可能になったものである、と主張したのであつた。このように、近代に入りヘゲモニーを握りつつあつた様々なレベルの権力体が、その存在を正当化するために特定の概念を構築し、それらがあたかも自然なものであるかのように受け入れられていたということが、批判の対象となり始めたのである。

このような批判の背景には、構造主義以降のフランス現代思想や、フランクフルト学派によって始められた批判理論の影響がある。例えば、サイドは明確にミシェル・フーコーを意識しているが、それはフーコーがそれぞれの時代において異なつた認識枠組（エピステーメ）が存在することを指摘した上で、ある概念に対する我々の理解の仕方が時代を超えて妥当するという考えは、その概念の存在自体も含めて極めて疑わしいと主張したからであつた。フーコーに限らず、概念そのものの持つ多義性や流動性に焦点をあて、現在の支配的な言説状況が、いかにその多義性や流動性を抑圧することで構築されているのかということを、批判的に分析するということこそが、フランス現代思想の大きな特徴であつた。また、フランクフルト学派においても、テオドール・アドルノなどの初期の理論家たちによつて問題とされたのは、進歩と自由を旗印にした近代啓蒙主義が、植民地主義とともにいかに野蛮と抑圧へと転化していくのか、ということであつた。そこでは、西洋において理想を達成する自明なものとされていた近代的理念が、それとは裏腹に、植民地主義を正当化してしまう暴力的なものであつたということが厳しく問われていたのである。この両者に通底するある一つの特徴として挙げられるのが、本質主義への批判であり、それは何らかの本質が存在すると見なすことこそが、ある事柄に関する自明性を支えることになるからだ。例

えば、「近代は本質的に進歩的である」といつた認識や、「日本人は昔から平和を愛してきた」などといったような認識である。これらのような自明なもの、あるいは本質的なものの存在を疑うこと、そして近代性の持つ暴力性を明らかにすること、といった批判的アプローチから影響を受けることで、サイドやアンダーソンなどによる近代概念批判もまた可能になつたのである。

こういったフランス現代思想やフランクフルト学派に端を発する批判的アプローチは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズといった研究にも受け継がれている。カルチュラル・スタディーズはもともとイギリスで発展したものが、そこでは人種と階級およびジェンダーの問題が複雑に交錯する審級として文化が問われている。ロンドンやパリ、ニューヨークあるいは東京などといった都市は、植民地宗主国の首都として多くの旧植民地出身の人が居住しており、近代による解放の恩恵に与つた人とその暴力に翻弄された人が、言い換えれば人種間や階級およびジェンダー間の格差に基づく対立がその間で常に生じる危機の渦中にいる人々が、同じ空間で生き遭遇していることになる。そのような状況では、支配的な人々にとつての自明性に対して常に疑問が投げかけられる契機が存在しており、そういった契機が文化をつうじてどのように生成しているかということを、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズ

は常に問題にしてきたのであった。そして、そうであるがゆえに、旧植民地であった国家において自明とされているような概念（例えばインドのナシヨナリズムなど）ですらも、それが歴史的に旧宗主国への抵抗として重要な役割を果たしていたことがあったとしても、ポストコロニアル・スタディーズは批判的考察の対象にしてきたのである。

このような潮流を引き受けた形で、主に北米を中心とした英語圏において、日本研究はドラスティックな展開を遂げたのであった。それは主にシカゴ大学の歴史学部を中心に発展し、それまでの日本を本質的に欧米と異なった東洋の民族文化を持つ人々であるとして捉える議論（日本特殊性論）や、あるいは来たるべき近代化のプロジェクトを未だ完成しきれていない人々であると捉えるような議論（近代化論）に対して、強い批判を加えたのである。つまり、「東洋」や「民族（的伝統）文化」、あるいは「近代性」といったことに対して、その自明性を批判しつつ、「日本」なるものが実体化されることの背景に権力が作用していることを明らかにしたのであった。それは、言い換えれば既存の「日本」の歴史研究はそれが「日本」という存在を自明視している以上、権力と隠れた形で共犯関係に陥っていると指摘した上で、そういった共犯関係に抗うような歴史研究の必要性を、提示するものであったのである。そして、このような文脈においては、「宗教」概念もまた同様に、

近代における権力体が自らの存在を正当化するために、発明・構築したものではないのかと批判されることになる。それは既に、タラル・アサドなどによってたてられた問いである。そして、それが日本の場合には、近代国民国家としての大日本帝国の成立と相関して、どのように起こったのか。このような問いが当然の成り行きとして、欧米における日本研究の文脈からは生じてくるはずである。そして、このような問題意識にそつた先駆的研究が、磯前順一<sup>①</sup>やあるいはジェームス・ケテラー<sup>②</sup>などによって既になされている。それでは、本書 *The Invention of Religion in Japan* においてはどのような議論が展開されているのだろうか。著者、Jason Ananda Josephson は、本書をアサドや磯前の議論を引き継ぎつつ、特に磯前の議論において見られる欠点 (deficiency) あるいは弱点 (weak point) を治療 (remedy) するものであると主張しているが、はたして本当に治療できているのだろうか。

Josephson によれば、世俗は宗教との二項対立によって成立しているのではなくて、むしろ世俗・迷信・宗教という、三項対立によって成立しているという。アサドによれば、世俗権力は、宗教を個人の信念の問題だとして私的な空間へと追いやる一方で、自らを公的な領域に関わる原理を保持するものとして提示することで、その支配を正当化してきた。それに対して Josephson は、世俗権力がまず禁止という形で迷信を取り締まった後、その迷信から

は外れるがしかしそれでも世俗とは相容れない信念が見出され、それこそが宗教として認識されるようになったものであるという。つまり、否定の否定こそが、宗教という概念の成立である、というのだ。この議論は大変説得的であり、本書の大半は、こういった形で宗教という概念が近代日本において成立していったということについての、詳細な歴史的な分析に割かれている。

だが、本書をつうじて Josephson の議論に対して感じる最大の疑問点が、アサドや磯前の議論に対する彼の批判が、彼らが世俗権力をあたかも何の宗教的信念も押し付けられないものであるかのように論じていることに対してなされている、ということだ。そもそも、アサドや磯前にとつて問題であったのは、何をもって宗教的信念であり、何をもって世俗的信念であるとするか、ということ。この境界線を引くこと自体が世俗的権力によつてなされている、ということであつたはずである。その意味では、世俗権力も場合によつては宗教的信念に組み入れられるような信念を強制していることを、彼らもまた考慮しており、その点において Josephson と特に変わりはないはずである。しかし、この点を誤解した結果、Josephson は神道を世俗の側に組み入れてしまう。国家神道という言葉をあえてさけつつ、神道世俗主義という言葉を採用することによつて、Josephson は近代日本の国家体制はある種の特定の宗教的信念を世俗権力が押し付けてくる国家として、そしてそれは実

際には近代西洋の世俗主義国家においてはありふれたものであるとして、議論してしまうのだ。だが、国家神道の問題は、それこそ世俗と宗教という境界線を確定することよりも上位の次元にそれが常に措定されていることのはずだ。世俗的領域も宗教的領域も、すべてを包摂するメタな原理として（磯前の言葉を借りれば、法―外な存在として）機能してきたこと、これが国家神道における天皇の問題である。Josephson はこの問題について何も議論を展開しないまま、単に近代国家の一類型という形で、神道と国家の関係の問題を処理してしまおうとしている。だが、それではなぜ一九三〇年代から四〇年代の日本において、天皇と神道そして国体があればどまでに苛烈なイデオロギーと化したのか、説明できないのではないだろうか。また、本書が神道については論じながら、天皇のことについてはほぼ論じていないということも、このような問題を消化しきれしていない、ということの証左であると思われる。

この意味では、アサドや磯前の議論を治療するというよりも、むしろ、彼らが最も問題としていたことを充分とらえきれないまま違う方向へと向かってしまった、というのが本書なのではないだろうか。

- (1) 磯前順一著『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』岩波書店、二〇〇三年。
- (2) James Edward Keelaa. *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution*. Princeton University Press, 1993.